花よりも小さく
～花への祈り～

現在も活躍中の詩人・画家の星野富弘。手足が不自由なため、口に筆をくわえて詩画集を書く。

「鈴の鳴る道」「かぎりなくやさしい花々」「かけがえのない毎日」「いのちより大切なもの」等々。その中の1冊「花よりも小さく」のタイトルが好きだ。

彼は群馬大学教育学部を卒業し中学校の教師になる。クラブ活動中に頸髄を損傷し、手足の自由を失う。入院中に口に筆をくわえて文や絵を書き始める。冒頭に紹介したように以後沢山の詩画集を発表、世界各地で個展も開いている。

私が好きな言葉「花よりも小さく」は、自分では何も出来ず、自然に咲く花よりも、自分の方がもっと小さいと言っているように私に伝わる。彼に限らず我々健常者にも言えるのではないだろうか。神の手のひらの中でみんな小さな存在であるのに、健康であるが故に自分を過信して日々の生活を過ごしているような気がする。

〈星野さんの詩〉

冬があり、夏があり、昼と夜があり、晴れた日と雨の日があって、ひとつの花が咲くように、悲しみも苦しみもあって私が私になってゆく。

花よりも小さいという星野さんの心が伝わってくる。私は星野さんの詩画集を見て、祈りを感じる。そして星野さんとは異なるが祈りの人たち、山口カルメル会のことを連想する。自分の祈りは願いごとの傾向があるが、自分を無にして、ひたすら神を賛美して祈りと沈黙と労働の中に生涯を修道院という囲いの中で過ごすシスターたち。日本には山口カルメル会のような修道院が現在9つある。山口カルメル会は1979年に日本で7番目の修道院として山口市仁保に設立された。しかし現在はシスターになる人は減少傾向にある。

「わたしは神のうちに、神はわたしのうちに」。

星野さんも入院中にキリスト教の洗礼を受けており、カルメル会とは全く異なるが「祈り」と共通するものを感じる。

私の巡礼の道をホームページにのせる手伝いをしてくれている壮年も交通事故で脊髄を損傷し、インターネットの仕事もわずかに動く右手人差し指だけでがんばっている。我々健常者が自分が健康であることにどれ程感謝して生活しているだろうか。そして科学万能と思っている現代人に一番欠けて、いや失っているのが祈りではないだろうか。

我々はみんな花よりも小さな存在であることに気付かねばと思うのである。

最後に星野さんの詩をもうひとつ。

「花より小さく
花の美しさが
なれ
見える」

山口カルメル会の冊子「神に呼ばれて」の中で

「私たちは日々を沈黙と喜びのうちに祈り働くことに召される」と。

祈りの人たち「山口のカルメリット」

星野の詩画集「花よりも小さく」